

同志社女子大学生活科学 Vol. 44, 39～44 (2010)

《原著論文》

親準備性傾向尺度の作成

Development of the Readiness-for-Parenthood Scale

西 田 郁 美 諸 井 克 英*
(Ikumi NISHIDA) (Katsuhide MOROI)

Abstract : The purpose of the present study was to develop a scale to measure readiness for parenthood among female adolescents. Items used by previous studies (Iwaji, 2009, *etc.*) were collected and revised. The Readiness-for-Parenthood Scale composed of 60 items was administered to female undergraduates ($N = 229$). A series of principal component analyses (with promax rotations) were executed. Readiness for parenthood was shown to consist of six components ; namely, concern for the child and baby, anxiety about parenting in the future, father as a role model, positive expectancy of a parental role, unconditioned acceptance of the child and baby, mother as a role model. The secondary principal component analysis was executed. The significance of research in readiness for parenthood was discussed in the family experiences context.

Key words : Readiness-for-Parenthood, parenthood, mother, father

I. 問 題

諸井(2003)は、わが国の家族状況に関する諸指標を検討し、以下のことを指摘した。「永遠の絆」であるはずの夫婦関係の危うさを意味する離婚率の上昇に加え、結婚自体がもつ価値の溶解が顕在化している。つまり、「結婚→親になる〈子どもをもつ〉」の図式が揺らいでいるのである。この中でも、「1.57 ショック」と呼ばれる出生率の低下は、この図式に基づく社会編成に様々な歪みをもたらしている。

1989 年の合計特殊出生率が 1.57 に達したのである。この指標は、その年次の 15 歳から 49 歳までの女性の年齢別出生率を合計したもので、1 人の女性が仮にその年次の年齢別出生率で一生の間に生むとしたときの子ども数に相当する。この後もこの指標は低下し続け、2008

年は 1.37 である(厚生労働省, 2010)。この「1.57 ショック」後、政府によって種々の「子産み・子育て」対策が採られるが、少子化傾向への歯止めとはならなかった。このような中で、女性の就労という現実と子育ての担い手としての女性(例えば、「3 歳児神話」との矛盾解決としての「子どもをもたない」という対処が指摘されたり、女性の側の資質変化という攻撃(「母性崩壊」)が行われたりしている。しかし、わが国の母性概念が明治以来の富国強兵政策以来、社会的統合の価値概念として歴史的に生成・操作されて来たことを踏まえると(大日向, 1991)、女性のみに少子化の解決を押しつけることは不当であろう。大日向(1991)は、この母性の対概念である父性も同様な問題を抱えることを指摘し、脱価値概念として「育児性」という用語を提唱した。

わが国の少子化傾向や男女平等意識の台頭と関連して、従来の母性研究を科学的に捉え直す立場から、親準備性概念(あるいは類似概念)が提唱され、様々な実証的研究が行われている。例えば、岡本・古賀(2004)

同志社女子大学大学院生活科学研究科
生活デザイン専攻

*同志社女子大学生活科学部

は、親準備性を「子どもが将来、家庭を築き経営していくために必要な、子どもの養育、家族の結合、家事労働、介護を含む親としての資質、およびそれが備わった状態」と広義に定義し、これを測定する尺度を作成した。本報告では、家族経験のどのような側面が個人的傾性としての親準備性に影響するかを解明する研究枠組みの一環として、女子大学生の親準備性を測定するための尺度作成を試みた。

II. 方 法

調査の対象および調査の実施

同志社女子大学での社会心理学関係の講義を利用して、質問紙調査を実施した(2010年5月24・27日)。回答にあたっては匿名性を保証し、質問紙実施後に調査目的と研究上の意義を簡潔に説明した。

青年期の範囲を逸脱している者(25歳以上)を除き、以下の尺度に完全回答した女子学生229名を分析対象とした(2年次129名, 3年次82名, 4年次18名)。つまり、父親と母親が健在である者に限定された。回答者の平均年齢は19.81歳($SD = .845$, 19~22歳)であった。

質問紙の構成

質問紙は、①就学前の母親に対する愛着尺度、②対父親・母親接触経験(過去)尺度、③回答者の基本的属性、④一般他者に対する愛着尺度、⑤親準備性傾向尺度から構成されている。本報告では、親準備性傾向尺度の結果のみを扱う。

1. 親準備性傾向尺度

個人的傾性としての親準備性を測定するために、先行研究(牧野・中西, 1989; 中西・牧野, 1989 a, b; 神谷, 2001; 伊藤, 2003; 岡本・古賀, 2004; 岩治, 2009)で使用された尺度項目を再整理して、独自の尺度を作成した。

先行研究で抽出された因子を概観すると、「子どもに対する感情・態度」や「親役割を担うことに対する感情・態度」に基本的に分類できる。ただし、岡本・古賀(2004)では家事労働や老親に対する介護、岩治(2009)では動物に対する共感性などの面も含まれている。確かに、「親になることの準備状態」を考えたときに、これらの面も培われるべき傾性となるが、ここでは、親準備性概念を狭義に限定した。例えば、家事労働に関わる態度は性役割観、動物に対する共感性は一般的

共感性(Davis, 1994)との弁別性が問題となるからである。先行項目での重複を整理し、表現を修正しながら、最終的に60項目を設定した(Table 1, Appendix 1 参照)。

この6ヵ月間の回答者の生活を思い浮かべさせ、60項目それぞれがあてはまる程度を4点尺度で評定させた(「4. かなりあてはまる」~「1. ほとんどあてはまらない」)。なお、評定順の効果を相殺するために、評定用紙を頁単位(7頁)でランダムに並び替えた。

III. 結 果

1 次主成分分析

まず、親準備性傾向尺度の項目水準での検討を行い、項目平均値の偏り($1.5 < m < 3.5$)と標準偏差値($SD > .60$)のチェックをし、不適切な項目を除去した。次に、残りの項目を対象に主成分分析(プロマックス回転($k=3$))を行った。初期主成分固有値 ≥ 1.000 を充たす解をすべて求め、適切な解を探索した。その際、①特定主成分への負荷量が十分に大きく($\geq |.400|$)、②他主成分への負荷が小さい($< |.400|$)という基準を設定した。各項目が単一の主成分にのみ $|.400|$ 以上で負荷を示すように、項目を削除しながら、①と②の基準を充たすまで分析を反復した。

項目水準での検討の結果、15項目が不適切であった($m > 3.5$: read_d_8, read_e_9; $m \approx 3.5$: read_a_9, read_b_2, read_c_3, read_c_4, read_c_7, read_d_2, read_e_6, read_f_6, read_g_2, read_g_6; $m < 1.5$: read_c_2 / $SD < .600$: read_b_2, read_d_8, read_e_9, read_g_2)。残りの45項目を対象に主成分分析を行ったが、2~11主成分解まで算出可能であった。項目内容と負荷のパターンを検討したところ7主成分解が適切と判断された。分析を反復し、最終的な主成分解を得た。第Ⅶ主成分については、read_c_8, read_f_9, read_a_7の負荷が高く、「親の教育的役割」と名づけることができた。しかし、この3項目での信頼性が $\alpha = .455$ とかなり低かったので、この3項目を除き6主成分解を求めた。明確な負荷量パターンが得られたので(Table 1)、本報告では親準備性傾向は6主成分から構成されると判断した。

第Ⅰ主成分は、子どもに対する回答者自身の態度や関心を示す項目が高い負荷を見せているので、「子どもに対する関心」と命名した。第Ⅴ主成分も、子どもに対する態度や関心に関わるが、この主成分に強く負荷している項目は子どもをありのままに受容する姿勢を表してい

親準備性傾向尺度の作成

Table 1 親準備性傾向尺度に関する主成分分析（プロマックス回転 $\langle k=3 \rangle$ ）の結果—6主成分解—：プロマックス回転後の主成分負荷量

	当該因子 負荷量		当該因子 負荷量
〔Ⅰ. 子どもに対する関心〕		〔Ⅲ. モデルとしての父親〕	
read_a_4	私は、小さな子どもに関心がある。 .904	read_e_7	私は、父親が育ててくれたように自分の子ども .872
read_b_7	私は、幼い子どもの瞳にひきつけられる。 .836		を育てたい。
read_a_6	私は、子どもが遊んでいるのを見るのは面白い .795	read_f_7	私は、自分の父親のようにになりたい。 .859
	と感じる。	read_f_4	私には、父親について良い思い出がありません。 -.830
read_a_3	私は、幼児の姿をつい目で追っていることがあ .734	read_g_4	私は、父親が自分にしてくれたことをいろいろ .793
	る。		思い出す。
read_a_8	私は、テレビに赤ちゃんが出てくると興味をも .734	〔Ⅳ. 親役割に対する積極的期待〕	
	って見る。	read_e_5	私は、将来、自分が親になることなんて考えた -.862
read_a_1	私は、幼い子どもが泣いていると、何とかした .687		こともない。
	いと思う。	read_d_9	私は、将来、親になった時のことを想像するこ .823
read_c_9	私は、保育所や幼稚園の前を通りかかると、中 .671		とがある。
	のをぞきたくなる。	read_e_3	私は、将来、自分が育児を楽しんでいる自分の .791
read_c_6	私は、小学生の遊び相手になれそうである。 .650		姿を想像することがある。
read_b_3	私は、子どものこころの動きに興味がある。 .647	read_b_1	私は、将来、子どもと遊んでいる自分の姿を想 .669
read_b_5	私は、子どもをあまり好きではない。 -.625		像する。
read_b_4	私は、幼児の相手をうまくやれると思う。 .621	〔Ⅴ. 子どもに対する無条件の肯定〕	
read_b_9	私は、小さい子どもの相手が苦手である。 -.618	read_g_3	親は、子どものすべてを受け入れるべきであ .665
read_a_2	私は、遊んでいる子どもの歓声をうるさいと感 -.537		る。
	じる。	read_g_1	親は、自分のことより子どもの世話を優先する .620
read_g_5	私は、小さな子どもの世話をしたり、遊んだり -.529		べきである。
	するのは面倒である。	read_e_1	親は、子どもに対しておおらかに接するべきで .592
read_d_6	私は、子どもとはおもしろい存在だと思う。 .528		ある。
read_f_3	私は、将来、子どもを扱う職業につきたいと思 .526	read_c_1	親は、子どもの気持ちを汲み取るようにすべき .554
	うことがある。		である。
read_a_5	私は、新聞などの子育てに関する記事をよく読 .424	read_f_8	小さな子どもの我が儘は仕方がない。 .510
	む。	〔Ⅵ. モデルとしての母親〕	
〔Ⅱ. 将来の子育てに対する不安〕		read_f_5	私は、自分の母親のようにになりたい。 .836
read_b_6	私は、将来、子育てに疲れ果て、イライラして .804	read_d_7	私は、母親が育ててくれたように自分の子ども .816
	いる自分を想像する。		を育てたい。
read_f_2	私は、将来、子育てに悪戦苦闘している自分の .784	read_e_2	私は、父親より母親のほうが子どもを育てるの .576
	姿を想像する。		に向いていると思う。
read_d_1	私は、将来、泣く赤ちゃんを前にして、途方に .767		
	暮れている自分を想像することがある。		
read_d_4	私は、将来、子どもをうまく育てられるかどう .566		
	か不安である。		
read_c_5	私は、赤ん坊の泣き声を聞くとイライラするこ .514		
	とがある。		
read_f_1	私は、親になったら子どものために我慢ばかり .483		
	すると思う。		

$N = 229$

初期主成分固有値 > 1.541 ；初期説明率 57.66%

		Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ
〔主成分間相関〕	I	-.320	.152	.470	.283	.036
	Ⅱ		-.176	-.182	.023	-.039
	Ⅲ			.171	.031	.166
	Ⅳ				.068	.106
	Ⅴ					-.011

るので、「子どもに対する無条件の肯定」とした。

回答者が育児者の立場におかれたときの否定的感情を表す項目が強く負荷している第Ⅱ主成分は、「将来の子育てに対する不安」と名づけた。第Ⅳ主成分は、育児者として自分を肯定的に捉えることを表しており、「親役割に対する積極的期待」とした。また、第Ⅲ主成分と第Ⅵ主成分は、親に対する回答者自身の態度に関する項目が強く負荷しているので、それぞれ「モデルとしての父親」、「モデルとしての母親」と呼ぶことにした。

下位尺度の構成

主成分分析の結果に基づいて、各主成分への負荷量を基準に ($> |.400|$) に項目を選別し、下位尺度項目を構成した。なお、主成分概念の方向に得点が高くなるように、逆転項目の得点を調整した。下位尺度ごとに、1次元性の確認をし（①項目－全体相関分析、②主成分分析）、 α 係数も算出した（Table 2）。「子どもに対する無条件の肯定」の α 係数が .6 台であるが、①や②の結果から十分な同質性の水準にあると判断できた。これらの

Table 2 親準備性傾向における下位尺度の検討

		相関 分析 (a)	主成分負 荷量 (b)
〔Ⅰ. 子どもに対する関心〕	read_a_4	0.832	0.866
	read_b_7	0.690	0.742
	read_a_6	0.691	0.735
	read_a_3	0.615	0.670
	read_a_8	0.729	0.775
	read_a_1	0.592	0.645
	read_c_9	0.670	0.715
	read_c_6	0.598	0.651
	read_b_3	0.645	0.694
	read_b_5*	0.745	0.794
	read_b_4	0.671	0.719
	read_b_9*	0.719	0.767
	read_a_2*	0.551	0.608
	read_g_5*	0.702	0.747
	read_d_6	0.485	0.539
	read_f_3	0.481	0.526
	read_a_5	0.414	0.455
		$\alpha = .928$	説明率 48.01%
$m = 2.92$ ($SD = 0.62$) ; $z = 1.059$ $p = .212$ (c)			
〔Ⅱ. 将来の子育てに対する不安〕	read_b_6	0.681	0.819
	read_f_2	0.570	0.748
	read_d_1	0.630	0.786
	read_d_4	0.477	0.653
	read_c_5	0.378	0.540
	read_f_1	0.371	0.533
		$\alpha = .771$	説明率 47.49%
$m = 2.45$ ($SD = 0.59$) ; $z = 1.233$ $p = .090$			
〔Ⅲ. モデルとしての父親〕	read_e_7	0.782	0.886
	read_f_7	0.773	0.879
	read_f_4*	0.726	0.849
	read_g_4	0.659	0.800
		$\alpha = .876$	説明率 72.96%
$m = 2.85$ ($SD = 0.84$) ; $z = 1.790$ $p = .003$			
〔Ⅳ. 親役割に対する積極的期待〕	read_e_5*	0.685	0.814
	read_d_9	0.831	0.911
	read_e_3	0.795	0.889
	read_b_1	0.786	0.884
		$\alpha = .898$	説明率 76.68%
$m = 3.21$ ($SD = 0.77$) ; $z = 2.324$ $p = .001$			
〔Ⅴ. 子どもに対する無条件の肯定〕	read_g_3	0.457	0.717
	read_g_1	0.409	0.671
	read_e_1	0.301	0.542
	read_c_1	0.421	0.679
	read_f_8	0.312	0.548
		$\alpha = .622$	説明率 40.39%
$m = 3.17$ ($SD = 0.43$) ; $z = 2.169$ $p = .001$			
〔Ⅵ. モデルとしての母親〕	read_f_5	0.671	0.915
	read_d_7	0.686	0.918
	read_e_2	0.268	0.500
		$\alpha = .706$	説明率 64.31%
$m = 3.17$ ($SD = 0.69$) ; $z = 2.354$ $p = .001$			

N = 229

*逆転項目

(a) 当該項目得点と当該項目を除く合計得点とのピアソン相関

(b) 主成分分析における未回転第Ⅰ主成分負荷量

(c) 正規性検定 <Kolmogorov-Smirnov の検定>

Table 3 親準備性傾向に関する 2 次主成分分析 (プロマックス回転 〈 $k=3$ 〉) の結果: 回転後の負荷量

	I	II
《養護対象としての子ども》		
子どもに対する関心	.884	.018
親役割に対する積極的期待	.748	.146
子どもに対する無条件の肯定	.650	-.252
将来の子育てに対する不安	-.412	-.311
《モデルとしての親の存在》		
モデルとしての母親	-.092	.742
モデルとしての父親	.049	.740
〔主成分間相関〕		
	I	.218

N = 229

初期主成分固有値 > 1.104 ; 初期説明率 54.19%

項目の平均値を下位尺度得点とした。なお、各得点の分布の正規性も検討したが、「子どもに対する関心」と「将来の子育てに対する不安」得点以外では正規分布からの逸脱が認められた。しかし、分布の極端な偏りはなかった。

これらの 6 個の下位尺度得点を対象に反復測定分散分析を行うと有意な効果が得られた ($F_{(3,91, 890.93)} = 48.42, p = .001$)。多重比較によって (Bonferroni の調整), 「親役割に対する積極的期待 \approx 子どもに対する無条件の肯定 \approx モデルとしての母親 > 子どもに対する関心 \approx モデルとしての父親 > 将来の子育てに対する不安」 ($p = .001$) の傾向が認められた。

2 次主成分分析

親準備性傾向の高次構造を探索するために、下位尺度得点を対象とした主成分分析 (プロマックス回転 〈 $k=3$ 〉) を試みた。この水準の分析では、主成分固有値 ≥ 1.000 を基準とした。明確な主成分パターンを示す 2 主成分分解が得られた (Table 3)。第Ⅰ主成分は、養護対象としての子どもに対する態度や関心に関する下位尺度得点が高い負荷を見せ、《養護対象としての子ども》と名づけた。対照的に、第Ⅱ主成分では、回答者の親への同一化意識を示す下位尺度得点の負荷が高く、《モデルとしての親存在》とした。

Ⅳ. 考 察

柏木 (1993) によれば、母性概念は次の 3 相から成る。①生物学的身体的性差に直結した「産む性」、②出産後母乳に始まる一連の養育行動としての「育む性」、

③母性主義における「母像」。②と③の側面は、「社会・文化」の産物である。本報告で扱った親準備性は、先述したように、規範価値的枠組みではなく、個人的傾性として培われた次世代育成のための準備状態であり、柏木の指摘する②を脱価値的に測定するための概念である。つまり、この準備状態は男性側にも育まれるし、従来の母性思想のようにこの親準備性を女性の側に規範的に求める社会風潮の下では、男性側に期待されない。

本報告で抽出された主成分は、2次主成分分析によって《養護対象としての子ども》と《モデルとしての親存在》に分類された。つまり、親準備性は、子ども存在への意識や関わりの志向性と、自らの父親や母親に対する評価志向性から構成されることが明らかにされた。親準備性傾向尺度の作成にあたり、先行研究で含まれている側面（例えば、岡本・古賀（2004）による家事労働、岩治（2009）による共感性）を一部排除した。このことによって、親準備性の構成要素が単純化されたといえる。例えば、共感性傾向は親の資質として重要であるが、それを親という役割自体に包含してしまうよりも、関連概念として位置づけたほうが生産的であろう。Davis（1994）は共感性を次の4側面から捉えた。①視点取得、②共感的配慮、③個人的苦痛、④想像性。これらは、いずれも親役割を担うための重要な関連概念であるが、次世代育成という親準備性自体ではないからである。

親準備性傾向に関するこれらの結果を踏まえて、次の解析段階として、同時に測定してある回答者の家族経験が親準備性にどのように影響しているかを検討し、稿を改めて報告する。

〈付記〉

- (1) 本報告で分析対象としたデータは、第1著者の西田郁美が修士論文研究のために立案・収集した研究の一部である。
- (2) データの統計的解析にあたって、PASW Statistics 18.0 for Windows を利用した。

V. 引用文献

- Davis, M. H. 1994 *Empathy: A social psychological approach*. Westview Press. 1999 菊池章夫訳『共感の社会心理学－人間関係の基礎－』川島書店
- 伊藤葉子 2003 中・高校生の親準備性の発達 日本家政学会誌, **54**(10), 801-812.
- 岩治まどか 2009 大学生における養護性の検討 東京家政大学研究紀要, **49**(1), 133-142.
- 神谷哲司 2001 青年が認知する親の養育態度と青年自身の親役割観との関連 母性衛生, **42**(4), 670-676.
- 柏木恵子 1993 日本における母性・父性をめぐって－思想的歴史的背景と発達心理学の理論と研究－ 柏木恵子編著『父親の発達心理学－父性の現在とその周辺－』川島書店 61-125頁
- 厚生労働省 2010 『平成21年人口動態統計の年間推計』 <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/suikai09/>
- 牧野カツコ・中西雪夫 1989 高校生の「親になることへの準備状態」と保育教育（第1報）－「準備状態」の測定尺度の作成－ 日本家庭科教育学会誌, **32**(2), 51-53.
- 諸井克英 2003 『夫婦関係学への誘い』ナカニシヤ出版
- 中西雪夫・牧野カツコ 1989 高校生の「親になることへの準備状態」と保育教育（第2報）－「準備状態」の形成に影響を与える要因－ 日本家庭科教育学会誌, **32**(2), 55-59.
- 中西雪夫・牧野カツコ 1989 高校生の「親になることへの準備状態」と保育教育（第3報）－「準備状態」の構成要素の分析と保育教育への示唆－ 日本家庭科教育学会誌, **32**(2), 61-65.
- 岡本祐子・古賀真紀子 2004 青年の「親準備性」概念の再検討とその発達に関連する要因の分析 広島大学心理学研究, **4**, 159-172.
- 大日向雅美 1991 「母性／父性」から「育児性」へ 原ひろ子・館かおる編『母性から次世代育成力へ－産み育てる社会のために－』新曜社 205-229頁

Appendix 1 親準備性傾向尺度における残余項目

read_a_7	子どもに社会との関わり方を教えるべきである。
read_a_9	私は、子どもを育て、良い親になろうと思っている。
read_b_2	親は、子育てを通して社会にも目を向けるべきである。
read_b_8	子育てとは、毎日同じ事の繰り返しである。
read_c_2	私は、赤ちゃんを見ても、別にかawaiiとは思感ない。
read_c_3	子どもは、人格をもった存在である。
read_c_4	私は、小さい子どもに頼られると嬉しい。
read_c_7	親は、子どもと接するときには子どもの視線で接するべきである。
read_c_8	将来を見通して子育ての方針を決めるべきである。
read_d_2	私は、子どもを育てることは、やりがいのある仕事だと思う。
read_d_3	子育ては、親の自由な時間を減らす。
read_d_5	親は、子どもの感情の動きに敏感にすべきである。
read_d_8	子どもを育てると親も成長する。
read_e_4	子どもは、社会の宝である。
read_e_6	私は、子どもがいる家庭は、子どもがいない家庭よりも楽しいと思う。
read_e_8	私には、母親について良い思い出があまりない。
read_e_9	親は、子どもにとって安心できる存在でいるべきである。
read_f_6	私は、母親が自分にしてくれたことをいろいろ思い出す。
read_f_9	子どもに対して毅然とした態度をとるべきである。
read_g_2	子育ては、人と人とのつきあいにつながる。
read_g_6	私も親となって、子どもを育てたい。

(2010 年 11 月 30 日受理)